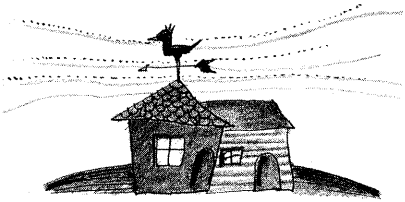
風に乗った五月（さつき）とメイ

皆川　美恵子

考古学者の父をもつ幼い少女は、新しい地に引っ越しをした次の日、穴の中に眠る大地の精霊を発見してしまった。その少女の名はメイといい、発見された精霊をトトロという。もっともトトロとはメイの命名によるもので、彼女は多分、絵本で見知っていた北欧の神話や童話に登場する大地の精霊（デーモン）トロールを、それらしく言葉に発した時、トトロと呼んだらしい。余談だが、このメイは、トウモロコシをトウモコロシとも呼び慣らわしている。

宮崎駿氏のアニメーション『となりのトトロ』（一九八八）は、作者が永年住み慣れている狭山丘陵を舞台として描いている。時代背景は、一九五〇年代頃であり、母親は結核のため、東京郊外の空気の澄んだ病院で療養生活に着いている。残された家族は頻繁にお見舞に出かけられるようにと、同じく近くの郊外に転居した。病院はアニメーションでは七国山病院となっているが、狭山丘陵の東端に位置する、関八州を見渡せるところから名付けられた標



高九〇mの八国山のことであろう。父と二人の娘が住むのは所沢の松郷である。農家に洋館を付け加えた、住み手のない荒れ果てた、お化け屋敷のような家であった。電気はあるものの、井戸と薪による生活である。

古ぼけた家に足を踏み入れた五月とメイの姉妹の目の前に、春だというのに艶やかなドングリがポトンと落とされた。時ならぬドングリの落とし主を求めていく二人だが、十一歳の五月より四歳のメイの方が謎の正体を先につきとめることができた。灌木の繁みの中の隠れ道を潜り、楠の大木の根元にウロを見つけ、不思議の国に落下していったアリスのように、ウロの中へ落ちてゆくことにより、メイは眠っているトトロの大きな腹にゆきあたることができたのである。

やがて五月も雨の中でトトロに出会う。傘を貸し、その御礼にと、トトロから笹の葉に包まれ龍の髭で結ばれた各種のドングリを贈られる。ドングリに導かれての、大地と樹木の精霊トトロとの邂逅。そして精霊トトロからの何ものにもまさる宝物ドングリの贈り物。宮沢賢治の『ドングリと山猫』を思いおこさせずにはおかない。ドングリは自然の秘密を内包した小さなカプセルなのだ。やがて何と山猫までが出現する。八本足の駿足の山猫によって烈風が駈け抜けるのだ。

☆

トトロは、松郷塚森の稲荷社にそびえる大木、楠に棲息している。その姿は、地中に眠るモグラのようでもあり、樹上にとまっているミミズクのようでもある。大地の精霊、樹木の精霊は、さらには天と地をつなぐ生命樹から山猫を管掌して、風を司る風の精霊としても描かれている。山猫は胎内に風をはらみ、猫バスとして狭山丘陵を自由自在に往還し、強く、鋭い風を吹きわたらせている。

大自然の営みを感受する中心軸としての生命樹には、楠が選ばれている。巨木調査が環境庁によって

実施されているが、それによると、巨木とは、地上一・三mの位置での幹の周囲が三〇m以上の樹木を指すという。埼玉県内には巨木が一四五二本あり、その内、最大なのが楠であった。これは全国調査でも同様で、巨木の王座は楠が占めている。（一九八九年六月発表の緑の国勢調査による）

日本列島で最も威風堂々と巨樹となりうる樹種は楠なのである。そして狭山丘陵は、植生分布では東日本にかけてのブナ林帯に属するのではなく、西日本の照葉樹林帯に属すという。現在の所沢周辺には欅の大木がそびえ、クヌギやコナラなど二次林としての落葉広葉樹が武蔵野の面影をとどめながら残っている。しかしかつては、楠、シラカシ、シイといった樹木が繁っていた。田畑に開墾された時に、それらが伐採され、その後に、今見る樹木が植えられたのである。

アニメーション『となりのトトロ』には、所沢のかつての農林風景が活写されている。農業用水路でもある柳瀬川。道の辺に立つ六地蔵。農家の裏手に広がる雑木林。この林が防風林の役目をし、さらには燃料用、暖房用木材の供給源であった。物語は、春から夏までで、秋から冬は登場していないが、この辺りは関東ロームにおおわれ霜柱の発生しやすい地域でもある。それによって破壊され、乾燥した表層が、冬の強い季節風によって砂塵となって舞い上がる。畑地の防風としては、お茶の木が植えられるようになった。狭山茶の発祥は、意外かと思われるかもしれないが、防風生垣から始まっており、後に栽培に転化したのであった。

☆

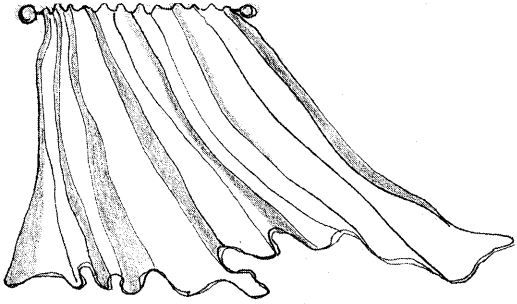
二人の少女には、五月・メイという、生命が輝き萌える季節の名称がつけられ、自然の精霊と交流可能な選ばれた子どもであることが示されている。

迷子となった妹の探索を頼むべく、地下へ落下した姉がトトロの腹の上に降り立つ。まるでキングコングが美少女をキャッチするように、しっかりトト

風を踊る方法

多田　慶子

ロの手の中に包みこまれ、願いは聞きとどけられた。猫バスが呼ばれ、丘陵地を疾駆してメイは見つけ出される。さらには病院へ向かい、母親にトウモロコシが届けられた。やがて猫バスは木の枝の上でニヤニヤ笑いながら消えてゆく。

猫バスが巻きおこす風はローカル・ウィンド。地球規模からいえば、ミクロの風であろう。風使いの名手、宮崎駿氏は、馬でもなく、馬車でもなく、猫――それも乗合バスとしてローカル・ウィンドをとらえた。この見えないはずのバスが空翔けるのを見た二人の少女。五月とメイは風を見、風に乗った。猫の胎内という土着的な母性の温もりをたたえながら吹きわたる風は、まさに生命の風そのものである。

（十文字学園女子短期大学）